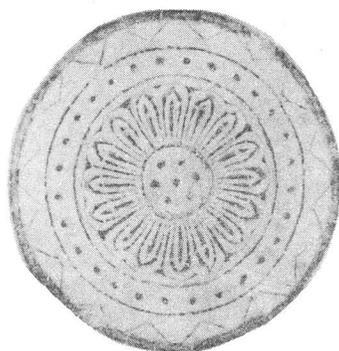


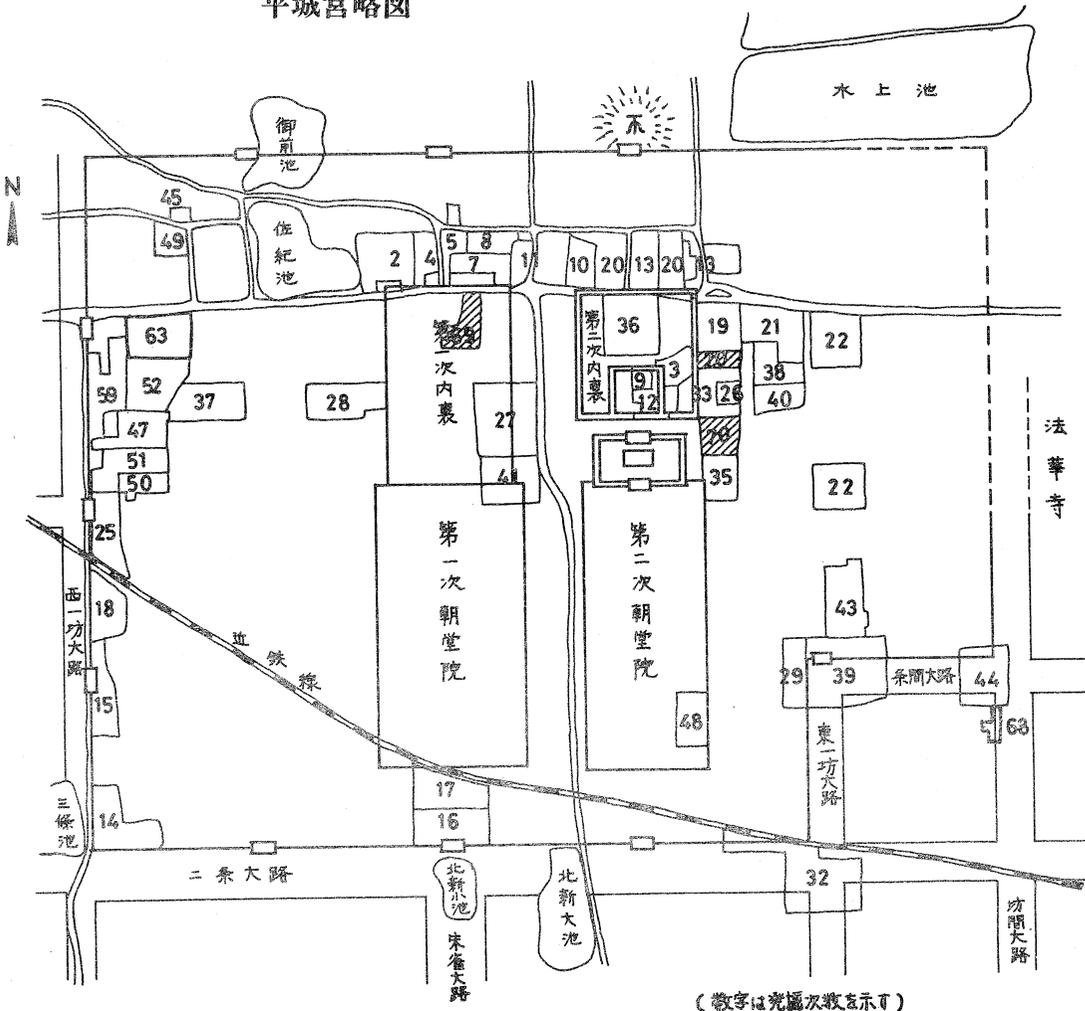
平城宮第69.70次発掘調査概報



昭和46年

奈良国立文化財研究所

平城宮略図



平城宮第69・70次発掘調査概要

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が特別史跡「平城宮跡」において行っている発掘調査のうち、昭和45年8月以降に調査を開始した第69次・70次調査についてその概要を報告する。

各次別の調査地区、発掘面積、期間は次表のとおりである。

調査次数	発掘地区	面積 ^a	発掘期間
69次	6ABP - A・B・D	34.15	昭和45年8月3日 ～ 11月21日
70次南	6AAE - N・M	31.2	昭和45年11月1日 ～ 昭和46年1月25日
70次北	6AAD - G	17.0	昭和46年1月6日 ～

I 第69次発掘調査

第1次内裏推定地北域の3415^mについて発掘調査を実施した。第1次内裏外郭については、大極殿推定地を取り込んだかたちで、東西約178m、南北約317mの長方形に築地回廊を巡らせていたことが第2～7次・27次・41次の調査によって明らかとなった。この築地回廊の内部を南北に3等分した北の一郭は、北から南へのびる丘陵の先端を利用した台地を形成しており、第36次調査の第2次内裏後宮に並ぶ地域である。台地は宮造営前の丘陵を利用した造成地であり、当初、地山を切り込んで台地の南限を設定していたが、のちに、更に南に拡張していることが判明した。ただし、拡張後の南限は後世に削り取られて判らない。

遺構は建物14棟、塀5条、溝などを主として、次の4期の建てかえが認められた。

A 期

A期に属する遺構は、この地域の中心建物SB6605と、この時期の台地南限を示す地山の段落SX6600、および木製階段SX6601などである。

SB6605は宮中軸線上にある東西棟で、7×2間分を検出した。現存の堀

方は浅く(10~20cm), しかも後の建物を殆んど同柱位置に建てかえているので, 確認できた柱堀方は10ヶ所にすぎず, 当初規模はこれより大きくなるかも知れない。

SX6600はSB6605の南9mのところを東西に一直線にのびている。高さは1.5~1.7mであるが, SB6605の堀方の深さなどから推定すると, 当初の高さは2.5~3m位あったと思われる。壁面は約70度の勾配をもち, 塼を全面に平積み・破れ目地で積み上げて化粧を施していた。しかし, 後の台地拡張のときに殆んど取り除き, 現存では最高7段を認めるにすぎない。なお, 壁面基底は築地回廊内の南北全長を3等分する位置にある。

SX6601は木製階段の支柱と考えられるもので, 正しく中軸線に位置して上記壁面にとりついていて, これはのちに取り払って, バラスを全面に敷き, このとき, もとの階段の南方に小抗列SX6604を打ち込んでいる。

当初の台地上面は次のB期の拡張に際して相当深く(1m以上)削り取られ, 拡張部分の埋土に使用されたらしく, そのために, 台地上の建物遺構は1棟を残して殆んど消失したものである。

B 期

台地を南に拡張すると同時に, 北面回廊を南に移して, 敷地全体を南にずらしている。また敷地内を10尺方眼地割として建物平面および配置を計画して大造営を行ない, 4期のうちで最も大規模に整備された時期である。

遺構は正殿SB6610と附属屋7棟(SB6660・6655・6663・6666・6669・6640・6650—各々東第1殿・2殿……7殿とよぶ), および発掘区北端のSC6670などである。

建物配置は正殿の東に18mの間を置いて, 第1~5殿の東西棟が南北に整列し, 正殿と第1殿のあいだに第6殿, 正殿と第3殿のあいだに第7殿を配置している。

正殿は9×9間, 総柱(ただし南面から第8柱列の中央4ヶ所は東柱)の大規模な平面をもっている。しかし, 梁間については北方が未発掘地にかかっているため, どこで前後2棟に分割できるのか, 現状では判断し難い。

東第1殿は身舎7×2間、南北両面廂つきの建物である。第3殿は第1殿に北孫廂と間仕切りをとりつけた平面をもつ。この2棟の中間に5×3間、馬道つきの第2殿が軒を接して建つ。第4・5殿はいずれも7×2間、間仕切り(10尺の開口部あり)のある建物である。第6殿(3×2間)、第7殿(桁行2間以上、梁間3間)はそれぞれ正殿と第1殿・第3殿の中間にあり、このあいだ(60尺)を5等分する桁行柱間(12尺)をとっている。

SC6670は柱間4m弱の礎石柱列で、第5殿の北10.5m(35尺)のところと東西6間分検出した。礎石はなく、大きな根石を残すのみであるが、西方ほど残存状態が悪く、西端柱位置では掘方の底が僅かに認められる程度である。この礎石柱列は昭和29年発掘の第2次内裏外郭北面築地回廊の南柱列の西延長上にあり、又、柱間も同寸であることなどから、一条通り道路敷下に築地回廊遺構の存在を想定することができる。

なお、この時期の後半に小改造を実施している。すなわち、第2殿を廃して、第1殿に北孫廂を増築し、第3殿とのあいだに南北塀SA6657を建てる。この塀は3間(6.3m)の目隠塀で、方眼地割にはのらない。

C 期

B期より建物規模を縮小し、配置を全面的に変更する。また、北面築地回廊を撤去し、敷地を塀によって小区面に分割するなど、遺構の性格は一変する。

遺構は正殿SB6620、脇殿SB6622、後殿SB6621の3棟の建物と、塀(SA6623、6624・6625・6626)、溝などである。

正殿は身舎7×3間(10尺間)に4面廂(14.5尺間)つきの東西棟である。身舎前面中央の4つの堀方には、30~60cmの深さのところと自然石が上面を揃えて環状(内径50cm程)に敷かれていた。建物の東面と西面には玉石敷き、埴積み側壁の雨落溝があり、南面には素堀りの溝がある。

脇殿は桁行5間以上(9尺間)、梁行2間(10尺間)の身舎に東西両面廂(14尺間)つきの南北棟で、北妻柱通りを正殿南面にあわせている。建物南面は削平されて、桁行全長は不明である。建物の東西北面には玉石の雨落溝を巡らせ、正殿の東雨落溝につながる。

後殿は桁行4間以上、梁行2間(9尺間)の礎石柱身舎に、掘立柱の南北両面廂(12.5尺間)つきの東西棟である。身舎の礎石掘方は、南面および北面柱通りで布掘りとし、妻柱では独立の掘方である。しかし、出土状態はきわめて浅く、根石は残されていない。なお、昭和33年の調査で、この建物の北廂に対応する柱列を2間分検出していることから、後殿を宮中軸線に対して東西対称に配置しているものと思われる。

塀SA6623は脇殿の妻柱から北に7間のびて、正殿と後殿を隔てる東西塀SA6624に接続し、その交点から東4間目のところで、更に、北に塀SA6625が12間のびて西に折れ、後殿の北を限る塀SA6626になる。SA6626の西延長上においても、昭和33年調査のときに柱列を検出しており、これを一連のものともみなせば26間以上の塀となる。これら4条の塀はいずれも3m(10尺)等間である。

発掘地東北隅に南北5間以上(10尺間)の柱列SX6629を検出した。SA6625とのあいだが6m(30尺)で、柱筋を合わせていることから、南に延長してSA6624につながり、又、北延長上では第7次調査のSA304に連なる位置にあるが、建物の西側柱か、塀になるかは不明である。

溝遺構は前記雨落溝のほか、正殿東側の前から1間目の柱から東に玉石溝SD6607が走り、正殿・脇殿雨落溝と交叉している。発掘区の北方には、塀に沿い鈎形に折れて東に流れる素掘りの溝SD6633がある。

この時期の建物平面の特徴は広廂とすること、脇殿、後殿で2.7m(9尺)の柱間をとることなど、前期とは著るしい相異をみせている。

D 期

SB6642・6614をC期の正殿・脇殿とほぼ同位置に配し、建物の規模を更に縮小している。

SB6642は身舎7×2間(桁行10尺間、梁行19尺)の北に廂・孫廂(7尺間)つきの東西棟である。身舎と廂は礎石、孫廂は掘立てである。身舎南面の柱列の礎石抜取り痕跡が僅かに残る程度で、しかも遺構面全体が南に傾斜していることなどから、身舎南面廂は削平された可能性が強い。

SB6614は身舎3×2間に南面廂つきの東西棟で、中心をC期脇殿の南北方向の心にあわせている。柱間寸法は桁行中央間を3m、脇間を3.6m、側面3間を2.7m等間とする。北面の東西両脇間にはそれぞれ3.9m、4.2mの出をもった廂がとりつくが、この2つの廂は時期が前後するかも知れない。

この時期の建物は以上の2棟だけであるが、配置の方法が前期の引き継ぎであるので、扉もそのまま利用された可能性がある。

遺物は瓦・土器・釘などである。

瓦はB期東第3殿の柱抜取穴から集中して出土した。軒平瓦6732・6664・6721型式が各々38・32・22%、軒丸瓦では6282型式が45%で最も多い。なかでも、通称東大寺式の6732型式はB期に限られ、同期の年代推定資料となる。

土器は土師器が少量ではあるが、B期の台地拡張部分下層とB期東第3殿柱抜取穴、C期の溝SD6633などから出土した。土器形式からみると、B期は天平末年まで遡らず、下限を奈良末期頃におさえることができる。また、C期の下限は平安時代に降るであろう。

今回の調査によって、第1次内裏推定地北域が第2次内裏後宮と酷似した機能を持ち、しかも奈良時代、平城上皇の時代を通して存続していたことが明らかとなった。

いま、第2次内裏後宮遺構（ABCの3期に分かれる）と今回調査の遺構について、B・Cの2期を比較すると、B期は双方とも10尺方眼の地割を行なっていること、C期では柱間寸法に広狭両用し、方位がB期より不揃いになることなど、技術的な面で似た性格を両期とも共有している。またB・C期はともに大造営期で、B期の後半には一部改造するなど、両者の状況は類似しており、同時性を推定できる。このような点を考えあわせるとき、第1・2次内裏地域のB期、C期は共に同年代と云えないまでも、それぞれに近い時期の造営になるものと考えられることができる。

II 第70次調査

第70次発掘調査は、第2次大極殿および内裏の東外郭にあたる南、北2地域で行なった。この地域ではすでに第19次、21次、33次、35次の調査が行なわれており、今回の発掘によって築垣に囲まれた東外郭部のほぼ全域の調査が完了した。

1. 南地区(6AAE)

第33次および第35次の調査区に囲まれた地区で、第2次大極殿の東部にあたる。検出した主な遺構は、築垣1・礎石建物1・掘立柱建物7・溝3などである。これらの遺構は、大きく第2次朝堂院・内裏造営期(B期)とそれに先立つ時期(A期)および以後の時期(C期)にわけることができる。

A期 第35次調査によって礎石建物(SB7550)基壇下に検出された南北棟掘立柱建物SB4550は、 13×2 間(柱間、桁行 2.4 m 、梁行 2.7 m)の規模であることが判明した。この建物の東 6 m に北縁をそろえた東西棟建物(3×2 間)SB6720がみられる。なお調査区の北端で、これらの建物とは方位を異にした南北棟建物(4×1 間)SB6745を検出したが、これは平城宮造営以前のものであろう。

B期 調査区の東端で、第33次および第35次調査で確認されている東面築垣(寄柱20間分、柱間約 3 m)SA705を検出した。築垣の東側は後世の削平で破壊されているが、柱穴は部分的に検出できた。西側の南部では雨落溝を検出したが、北部は残存していない。なお築垣の寄柱には、2度のつくりかえがあるが、改築の時期は明確でない。また、築垣西側の雨落溝上に南北方向の小柱列が検出された、修築にともなうものであろうか。この築垣西方に、第35次調査で南半部を確認した南北棟礎石建物SB7500があり両年度の調査で根石と、西側中央で階段の桁受け石(凝灰岩)を検出し、木階を有した、 7×4 間(柱間・桁行約 3.9 m 、梁行約

3.4 m)の楼ふう建物であったことが判明した。基壇は南北約31m, 東西約18mで外装は残存しておらず痕跡も明らかでない。この礎石建物の北5mに柱列をそろえた南北棟建物SB6700がある。10×2間(柱間3m)で、これと同一規模の建物SB6701がその東6mに並列している。なお、築垣と礎石建物の間にSB6720に重複して東西棟南廂付建物SB6710(4×3間)が検出された。

C期 この期は、礎石建物の東方部が凝灰岩片や瓦片などを含む土で整地された時期で、SB6710, 6720に重複した東西棟西廂付建物SB6730(4×2間)がある。

遺物は、北部の土壇SK6750・6800・6810などから多数の瓦片、土器片が出土している。瓦類は、軒丸瓦約560点、軒平瓦440点、鬼瓦10点・面戸瓦・刻印瓦(司)などである。このうち軒丸瓦では6225型式が約29%, 6311型式22%, 6313型式17%, 軒平瓦では6663型式が38%, 6664型式27%, 6685型式13%をしめている。なお、6225-L型式の大型瓦が17点みられた。また埴に文字の線刻されたもの2点(「本直七左…」・「…直三右…」)ならびに緑釉埴小片も出土している。土器類には三彩, 二彩, 緑釉の小片があり、土壇から奈良末期の土師器が一括出土した。その他石帯1などもあった。

2. 北地区(6AAD)

第21次および第33次の調査区に囲まれた地区で、第2次内裏の東部にあたる。2月20日現在まだ調査中であるが、これまでに検出している主な遺構は、築垣3, 門2, 道路2, 礎石建物1, 塀立柱建物2, 溝12, 井戸1などである。これらの遺構の多くは第2次内裏造営時のものと考えられるが、やや時期の下降するものもみられる。

第21次および第33次で確認されている調査区東縁の築垣SA705は、築地本体の積土がよく残存している。この積土は、これまでの調査で確認された寄柱列の上に築成されていることから改築のものと考えられるが時

期は明確でない。この築垣北寄りに東面の門（1間約3m）SB6820があり平安内裏の建春門にあたる。その西方には内裏を囲む築地回廊の東門に通じる道路SX6850（幅6m）がある。この道路の南北には、築垣SA705にとりつく東西方向の築垣SA6840、6860があり東方部でそれぞれ雨落溝と共に検出された。西方部は後世の削平ですでに地山が露出しており、遺構は残存していないため明確でないが、調査区の西外側にある道路および排水溝下でこの築垣は南北にそれぞれ折れ曲っていたことが想定される。築垣SA6860には、門SB6830（約3m）があり玉石敷南北舗道SX4285（幅4m）に通じている。この東および北の築垣で囲まれた地域に、第33次調査で南半を検出した南北棟東西廂付礎石建物SB4300があり、新たに南北3間、東西4間分の礎石総てが原位置を保って検出され、7×4間（柱間4.45m）、基壇南北34m、東西20mの大規模な建物であることが判明した。道路SX4285をへだてて西側に南北棟掘立柱建物SB4290があり、12×2間（柱間3m）で北縁は礎石建物と柱通りが一致している。なお、北より2間目と5間目に間仕切りがみられる。その北方6mに井戸があるが未掘のため時期は明確でない。またSB4300の北には後補の廂が西から3間分とりついており、その東に東西棟建物SB6825（3×2間）が接している。このSB4300の北部、特に築垣で囲まれた東北部には、炭灰の充満したピットや焼痕のあるピット群、溝数条などがあり、この一角で金工か鍛冶を行なったものであろう。

遺物は、瓦片、土器片が多く、軒丸瓦は約90点出土のうち6311型式がその33%をしめ、軒平瓦は160点のうち6664型式が66%をしめている。土器は土師器、須恵器片の他に二彩、緑釉の小片が数点ある。また「ふいご」の羽口、スラグ、銅片などが多数出土している。

3. 第二次内裏東外郭について

第二次内裏東外郭は第70次調査でほぼ全域の発掘調査を終了した。こ

これまでの成果を総合してみるとその状況はおよそ次の通りである。すなわち、この区域は内裏東面築地回廊と、築地 SA705 に囲まれる南北約 190 m、東西 50 m 強の一郭で、南は南面築地回廊の延長 SA4230 に限られ、北は県道などによって調査できない部分に障壁があるものと推定できる。SA705 には今回検出された門 SB6820（平安宮の建春門にあたる）があり、これから東面築地回廊の中央にある閤門（平安宮の宣陽門にあたる）に向かう道と、その両脇の築地によって、東外郭は南、北二区に分割されている。両区とも東北よりに東西庇つきの南北棟建物を置き、これが各区の主建物とみられ、その南方に小形の東西棟を、さらに西方よりには細長い南北棟建物を設けることを、各地区とも配置の原則とする。これは南北に長い敷地の形から生じたものらしい。

SA705 はさらに南北に延び、南では約 100 m 南で西に折れて大極殿回廊東南隅に接続する。これが第 70 次南、および第 35 次調査地区にあたる。いわゆる東楼跡（未調査）もこの一郭に位置している。北方は県道（通称一条通）の北まで延び、第 13 次調査で兵衛関係などの木簡 2000 点余を検出した一郭に連なる。

南・北両区とも築地回廊との間は築地などで分離されていたとみられるが、築地跡自体は不明瞭である。

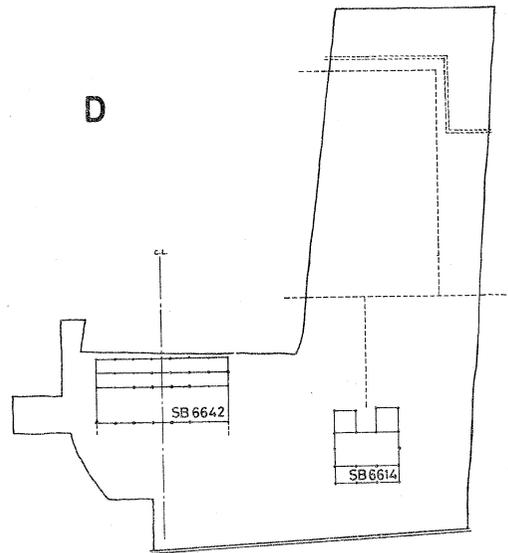
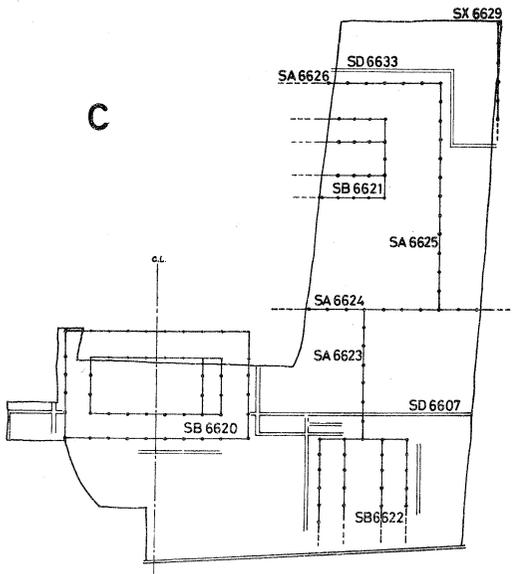
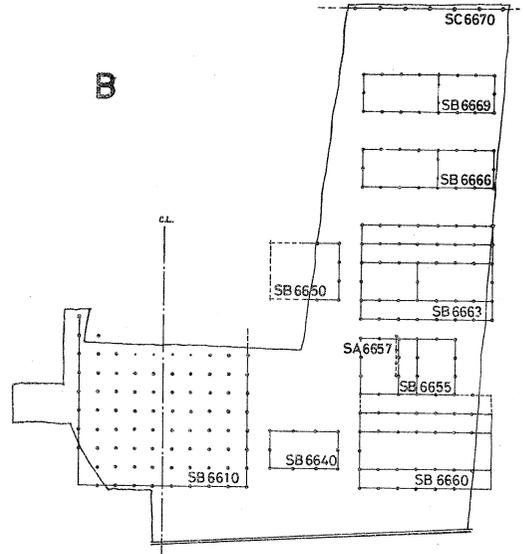
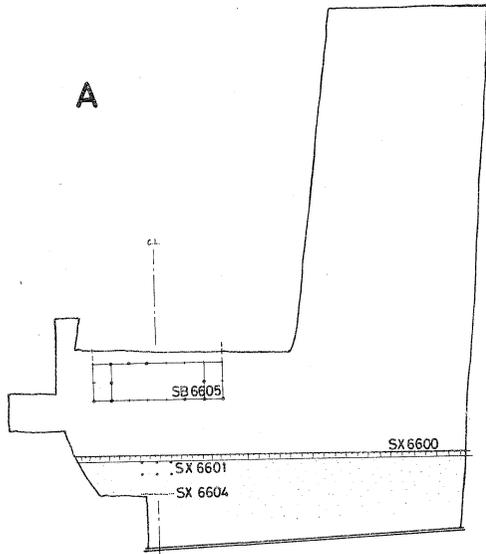
これらはいずれも第二次内裏・朝堂院と同時期に大規模な造営が行われたもので、内裏と大極殿とを密接にとりかこむ配置をとっており地形上からも、内裏につぐ小高い台地上を占め、重要な役割のものであったことをしめしている。確実な名称や機能などは木簡・墨書土器などの直接的資料がないため明らかではないが、内裏自体に関係の深いものであったことは充分推定できる。平安内裏では建春門外に門裏附属の曹司などが置かれているが、あるいはこれらの機関が内裏外郭築地にあたる SA750 の中に含まれていたものか、とも考えられる。宮内省の正庁なども想像できるが、東方に流れる東大溝の北方（上流）で宮内省等の墨書土器が発見されているので、今回発掘された付近にはにわかには定め難い。

大極殿東外郭で第35・70両次にわたって検出されたSB7500は礎石を用いて身舎にも柱を略さない構造で、しかも西面の中央に一間の木階を附すところから、高床、または楼造りの特殊なものとみられる。これとは別に西に接して東楼跡と従来考えられてきたマウンドがあり、これら両者の関係については現状では理解し難い状況となった。この一郭が内裏の附属的なものなのか、大極殿に附属する儀式的な用途のものなのかは今後、東楼跡の調査をまって論ずべきであろう。

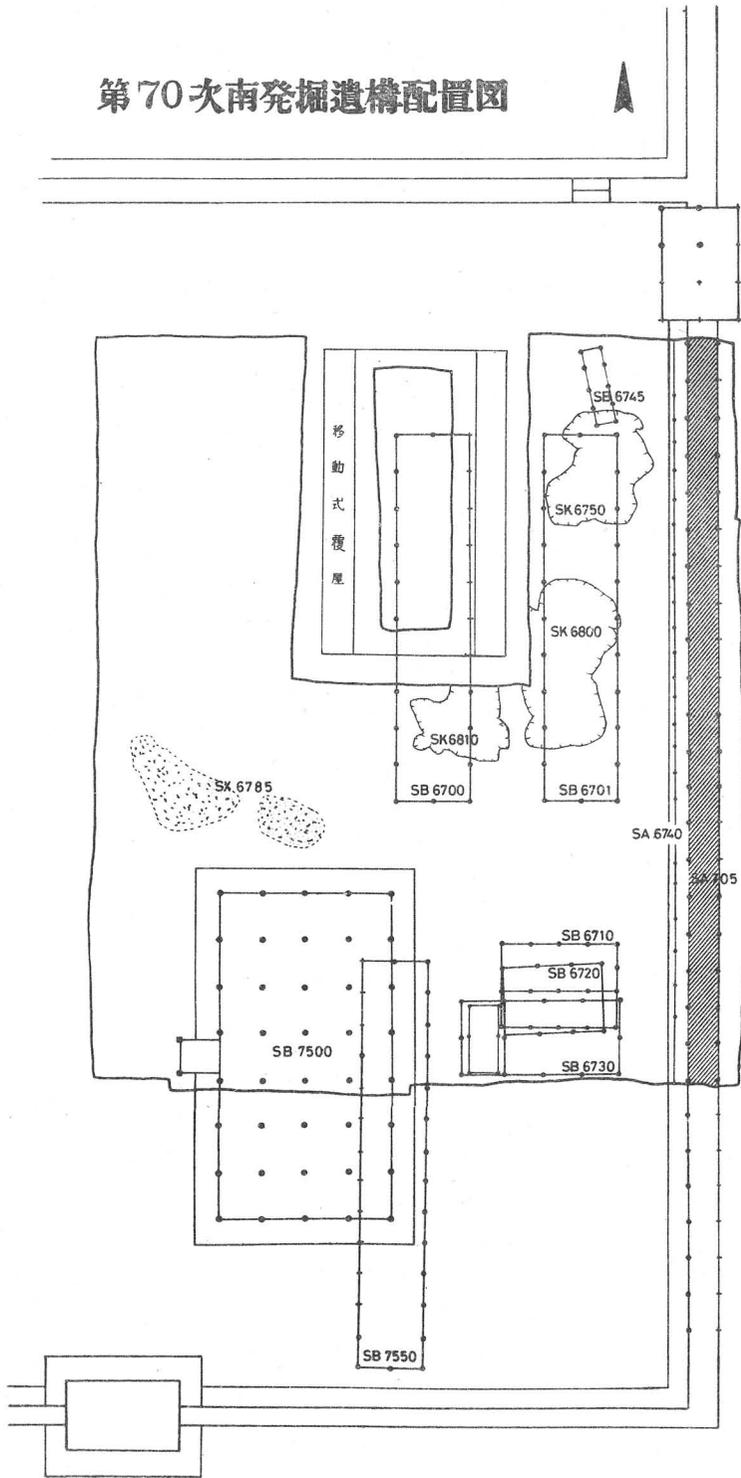
第69次発掘遺構配置図



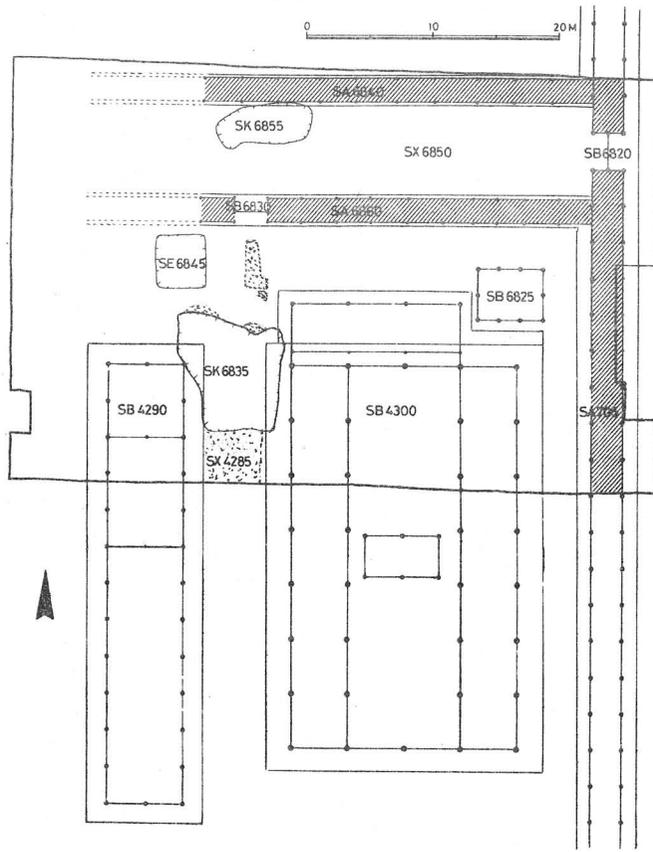
0 10 20 30 M



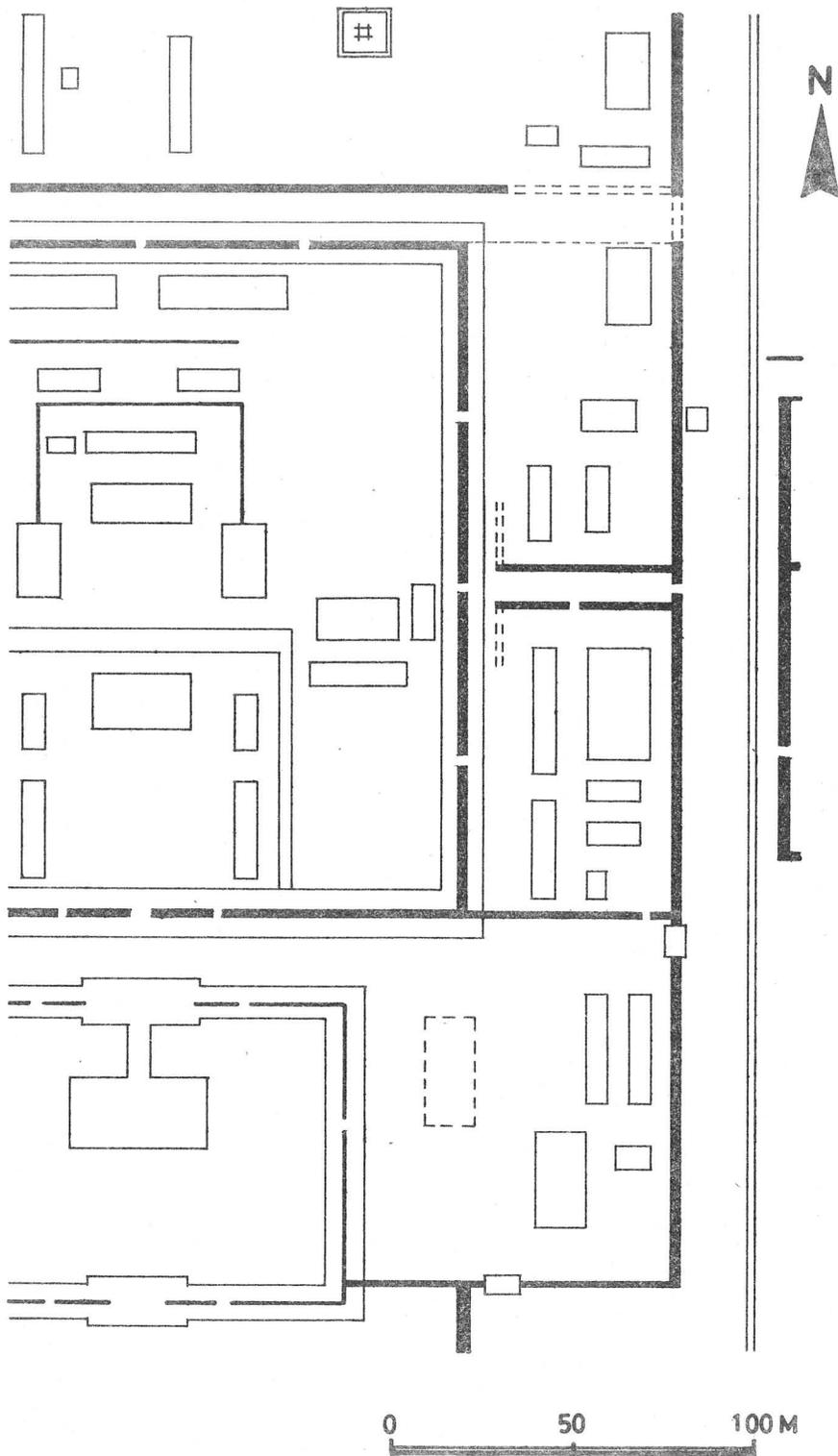
第70次南発掘遺構配置図



第70次北発掘遺構配置図

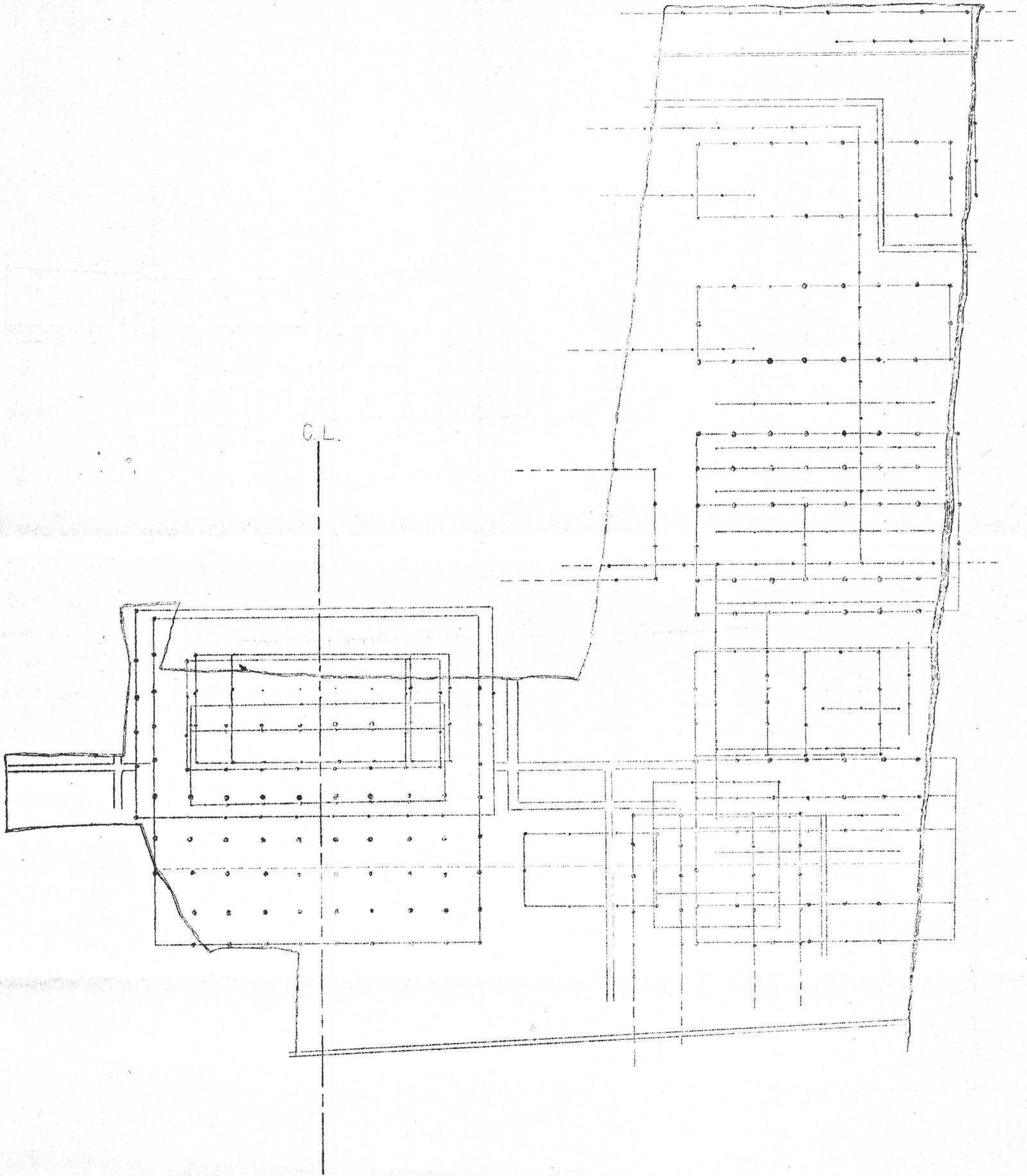


第2次内裏外郭配置図

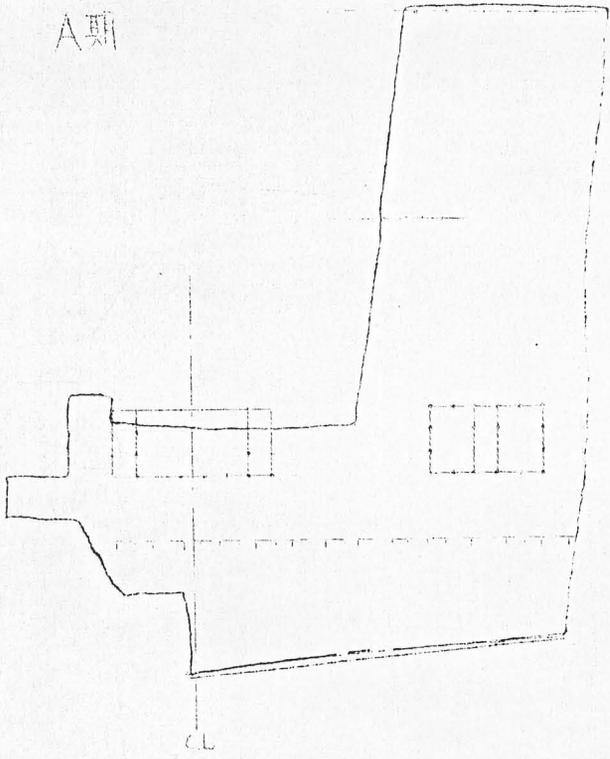


平城宮跡第69次発掘調査遺構図

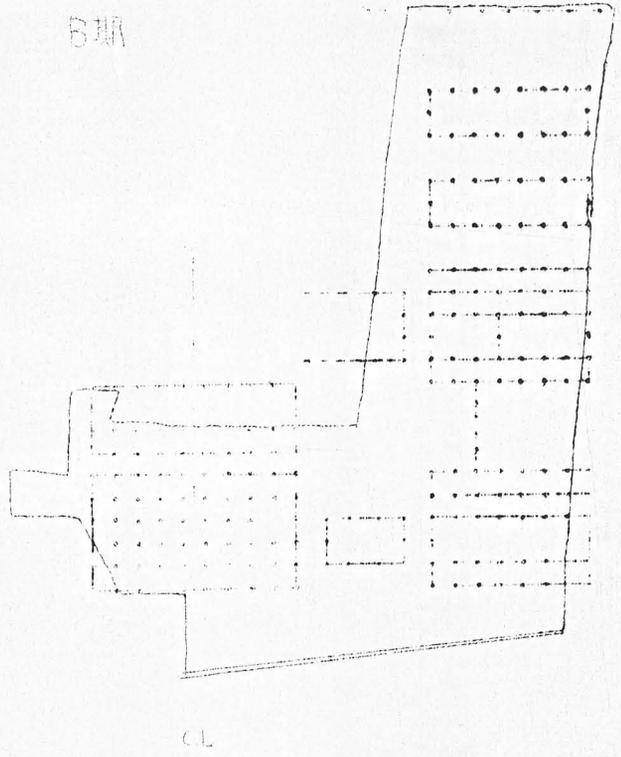
1/400



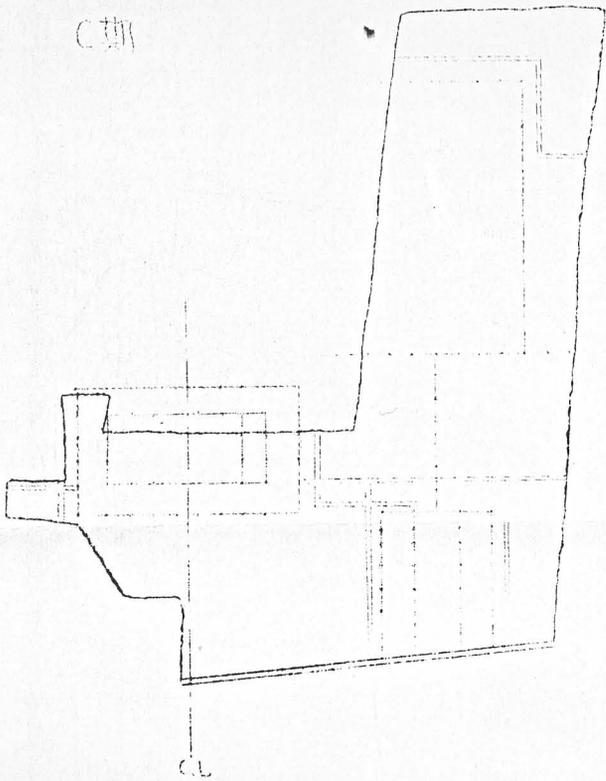
A期



B期



C期



D期

